

家庭

「地球をたがやす」ひとびとニカラグアで



あたり一面を覆う猛烈な臭気で、目が開けていられない。2時間も撮影をしていると、湿気と暑さと疲労で吐き気がしてくる。

94年、私は中米ニカラグアのごみ捨て場にいた。ぼんやりとした頭で撮影を続けるうち、地面に足をとられて転んでしまった。よく見ると、腐乱したヤギと鶏の塊に足を突っ込んでいた。

ニンジンやキャベツの切れはし、パック入りジュースの残り、衣類や建築廃材、朽ちかけた段ボール箱、原形をとどめないプラスチック製品の残骸(ざんがい)など。目の前に日常生活の終わりが迫ってきた。

「オーラ！ オーラ！（こんにちは、こんにちは）」。スペイン語で



最終地点から始まる営み

宇田 有三

声をかけながら、再びシャッターを切っていく。のどが異常に渴き、持ってきたペットボトルの水もすぐになくなる。空になったボ

トルを片手に、困った顔をしていたのだろう。

「チーノ（東洋人への呼びかけ）食べるか」。ごみの中から拾ったスイカを差し出すおじさんがいた。場違いの異邦人にげんな顔をしていた人たちに、ようやく受け入れてもらえたのか。なんだか、ここで働く人との一体感を感じた。

日暮れが近づいてきた。暗くなると、さすがに物騒になる。最終バスに間に合うように帰路を急ぐ。ふと後ろを振り返り、その風景に、息をのんだ。

ごみ平原の向こうに、畑に鍬(くわ)を入れるような姿があった。その瞬間、大地をたがやして生きる人間を思い浮かべた。

ああ、ここでは、人の暮らしの最終地点から、再び生活を始める営みが始まっているのだ。何も生み出さず、写真ばかり撮っている自分と、彼らを一体化したおごりを恥じた。

(フォトジャーナリスト)